



霜月祭の「願ばたき」

小松 和彦

秋も深まってくると、昔、学生たちと共に数年にわたって調査・見学した、南信州・遠山谷の村々の「霜月祭」を思い出す。私たちが見学したのは、主に旧上村の下栗と中郷の祭りで、当時は高速道路も、飯田と上村を結ぶ矢筈トンネルも通じておらず、飯田線の平岡駅からバスで南信濃村、さらにその奥の上村に至るのが最も一般的なアクセス方法で、松本からたつぷり半日はかかった。

霜月祭は湯立神楽の系統に属し、社殿前の舞殿の中央に造られた竈(湯殿)の周りで、さまざまな神事や舞、仮面行事が行われる。荘園儀礼が起源とする説が有力だが、地元では、この地方を支配していた豪族・遠山一族が百姓一揆で滅亡し、その後、遠山氏の崇りとみなされた疫病が発生したので、これを鎮めるために始まったと信じられていた。

祭りの前半は、神名帳の奉読など比較的厳かな雰囲気の中で神事や舞が続く。それまで舞殿の隅に立って祭りを見学していただけの学生たちが色めき立つのは、後半の夜も更けたころから始まる仮面行事で、遠山土佐守とその家臣を表す沈痛な面持ちをした「八杜の面」や、湯切りをする荒々しい火王・水王・木王・土王の「四面」など、様々な仮面が次々に現れて、興味深い所作を繰り広げる。

とりわけ学生たちが興奮したのは、ヨーオッセ、ヨーオッセのかけ声に合

せて舞手が舞殿を飛び回り、次第に観客の中にまで飛び込んでくるので、それを観客が受け止めて追い戻す場面であった。ヨーオッセのかけ声があがると、観客同士でも同様の押し合いが始まり、舞殿は騒然とした雰囲気包まれる。

祭りの締めくくりに役目をもった「天伯」が登場するまで、こうしたことが繰り返されるわけだが、実は、私が最も感動したのは、祭りの休憩時間を利用して行われる「願ばたき」という行事であった。

願ばたきとは、竈の湯を柄杓などに汲み、禰宜や立願のあった家へ持って行って湯で清める神事で、私が見学したのは、某家の主人が村会議員に当選したことのお礼として行われたもので、その家では座敷に特別な膳が用意され、家族はもとより親族や知人たちが勢揃いして、禰宜たちが運んでくる湯を厳粛な面持ちで待っていた。これを見たとき、私は、この祭りが地域の人びとの生活に密着し欠くことができないものになっていることを肌で感じ取った。

信州大学を離れてからも何度か見学に赴いたが、もう久しく訪れていない。過疎化が進む現在、祭りはどうなっているのだろうか。

(こまつ かずひこ)

国際日本文化研究センター名誉教授